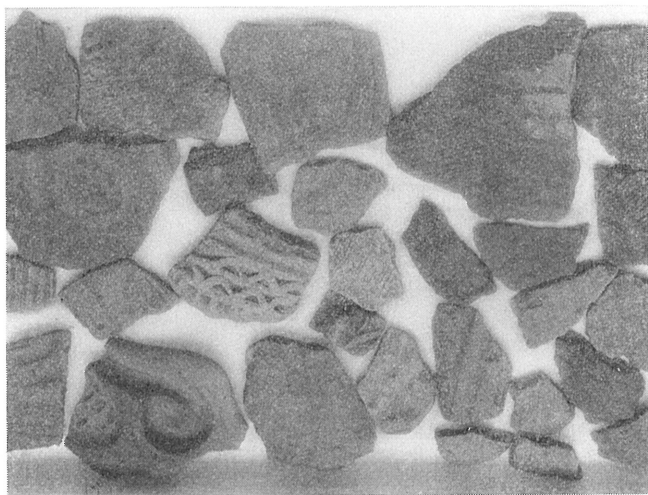
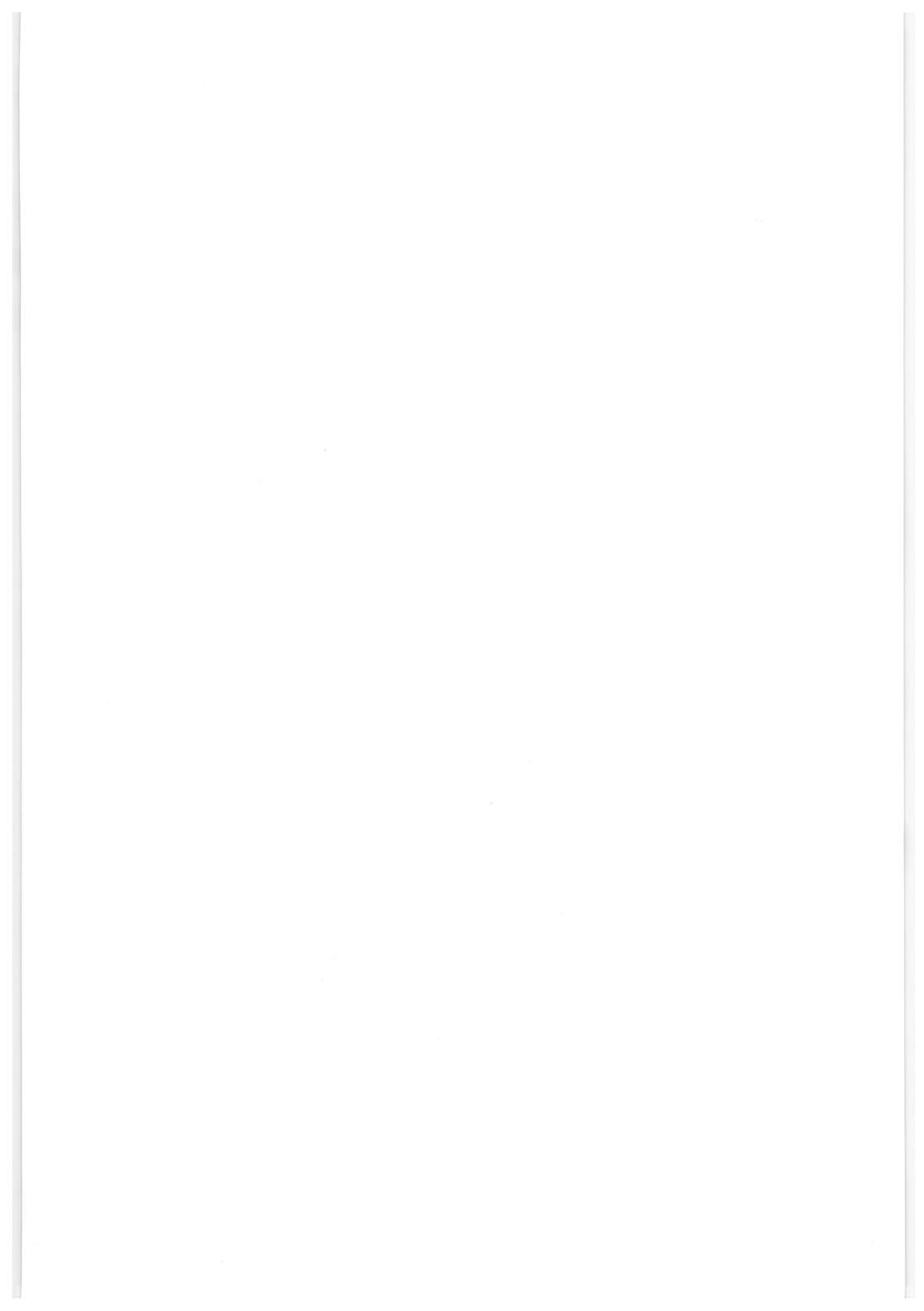


第一編
原
始



縄文期土器片（釈迦堂山遺跡出土）



第一章 遺跡の概況

第一節 郷土の位置と自然

地形

JR東海道線の小田原駅から下りの列車に乗ると、まもなく車窓の右手に箱根外輪山の山並みが迫り、左手はるか相模湾上には三浦半島が望まれ、眼下には垂直に近い海崖が連なる。三つ目の駅が真鶴。町域は神奈川県南西部に位置し、箱根火山の南東側外輪山麓と相模湾に突き出た小半島から構成されている。駅は箱根山麓がわずかにひらけた半島の付け根部分にあり、主な居住地域は、駅周辺の平坦部から港へかけての斜面（真鶴地区）と岩海岸付近（岩地区）に集中する。半島の先端からさらに沖合へ五〇〇メートルの岩礁・礫州でつながる笠島（三ツ石）があり、その位置は北緯三五度八分、東経一三九度一〇分を測る。半島の長さは約三キロメートルで、箱根火山の溶岩流が基盤となっている。

小田原市早川から真鶴にかけての海岸は、比高八〇メートル以上の急崖である。これは箱根火山の山腹が海浪で浸食された海食崖である。半島全体は高さ五〇〇～六〇〇メートルの台地状をしており、幅は広いところで約七〇〇メートル、狭いところで約二〇〇メートルである。半島の海岸線全般は磯であるが、琴ノ浦・三ツ石付近・番場浦・大浜・尻掛などの地域にわずかながら砂浜をみる。一方、岩海岸は遠浅の海水浴場として知られてい

る。

町で河川と呼べるものには岩海岸に注ぐ岩沢川があるが、常時は涸れ川であるため農業その他への利用はない。かつては瀧門寺の裏山から湧水が滝となって流れ出ており、付近には多少の水田が営まれていたこともあった。一九三九年（昭和一四）の真鶴地区の土地利用状況では、利用可能な面積約二二九町歩（約二・一平方キロメートル）のうち畑地が九一・六町歩（〇・八四平方キロメートル）で最も多く、そのほかは森林・草地・宅地に利用され、現在も水田はない。

地 質 地層は、箱根火山の安山岩、赤土と呼ばれる関東ローム層、沖積世層の順に堆積している。安山

岩は、箱根火山の活動で形成されたものである。箱根火山の活動の第一期（約四〇万年前に始まり二〇万年前に終わる）に、約二七〇〇メートルの高さを持つ成層火山が成長した後、カルデラが形成された。

同じ時期に箱根火山の南東斜面には、側噴火の星ヶ山、溶岩円頂丘の幕山、潜在火山の聖岳が成長し、地域一帯の安山岩はこの期間に形成された。旧来、これを採掘利用する石材業が、地場産業の一つとなっており、産石は「小松石」と称されて名高い。

神奈川県西部の関東ローム層は、主にその後の箱根火山と富士山の活動によって噴出された火山灰が堆積したものであり、箱根火山の活動が下火になった約一万年前にその形成が終了した。大磯丘陵ではその厚さは三〇〇メートルにもなっている。沖積世層は主に黒褐色をした土で構成されており、現在の地表面までの層をいう。

気 候

気候は黒潮の一部が流れる相模湾に面しているため、冬は温暖である。一九三九年（昭和一四）の尋常高等小学校の郷土地誌研究での発表（『資料編』近・現代No.114）によれば、真鶴町の過去一二年間の平均気温は年間一五・六度、八月が二六・三度、一月が五・五度、平均年間降水量は一八〇六ミリで

ある。年平均気温が一五度を超え一六度近い数値を示す地域は、神奈川県内では三浦半島の先端付近と真鶴半島だけである。神奈川県以外では『理科年表』一九九三年（平成五）版によると、和歌山県の尾鷲・岡山・徳島・松山など、冬に温暖な西日本地域の都市が近い数値を示している。なかでも尾鷲は一月、八月の平均気温もきわめて近い数値を示している。真鶴や尾鷲の八月の平均気温は冬に同じ気温であった都市よりも低く、しのぎやすい気候といえよう。また、年間降水量も県内では多い方である。

植

生

植生では温暖な気候のため常緑広葉樹林が見られる。保安林となっている真鶴岬付近ではスダジイ・クスノキ・タブノキ・ヤブニッケイ・アオキなどが生育している。これらの樹木は葉が常緑で光沢のあることから照葉樹とも呼ばれる。照葉樹林は日本列島の北緯三八度前後までの海岸部を中心に分布している。これ以南の平地では内陸部まで広がっている。真鶴岬の照葉樹林の中には、スダジイ・クスノキ・タブノキなどの高木に陽の光が遮られ、その木々の下にはアオキ・ヤブニッケイなどの低木、さらに地表近くにはシダ類が生い茂るうっそうとした景観である。

第二節 真鶴の遺跡

存在の確認されている遺跡は『真鶴町史資料編』（以下は『資料編』と表記）に記載した荒井城址を含めて九遺跡である。内訳は縄文時代の土器包含地が七か所と古墳が二か所である。土器包含地はほとんどが集落遺跡だろう。一九七九年（昭和五四）に発行された『神奈川県史』（以下は『県史』と表記）の編纂時には、このほかにも大浜で横穴墓が確認されたようだが、今回は確認できなかったのので数には入れてない。

旧石器時代の遺跡、弥生時代の遺跡、古墳時代の集落遺跡、奈良時代以後の遺跡は確認されていない。弥生時代の遺物は『県史』編纂時に平台遺跡で確認されたようだが、土器も未確認のため発見されていないことにした。

真鶴町の原始時代の中で欠けている時期は、中世に同じ土肥郷であった湯河原町や熱海市泉地区に遺跡を求め補うことができる。旧石器時代の大越遺跡、弥生時代後期の嶽の山遺跡、古墳時代中期から後期に属する竹の花遺跡などである。また湯河原町には古墳時代後期に属する八雲里古墳、船岡横穴墓がある。とりわけ、これらの古墳は真鶴町に近接した地域にあり、町の歴史を考える上で参考になる。

遺跡ではないが、湯河原町東部の鍛冶屋地区尾崎山に黒曜石の露頭があることは考慮に値する。大きな露頭なので採取しやすく、周辺ではミカン畑の石垣として、河原石の代わりに黒曜石の石礫塊が無造作に使われているほどである。黒曜石は天然のガラスで、金属がない旧石器時代や縄文時代、金属を入手することが難しい弥生時代では、鋭利な刃を持つ利器を作る上で得がたい材料である。とりわけ、石鏃や石匙など狩猟に使用される道具は黒曜石製のものが一般的であり、縄文時代人にとっては重要な石材である。この石材の産出は、湯河原町・真鶴町に縄文時代遺跡が立地する重要な条件の一つではなからうか。

第三節 今までの研究

江戸時代

真鶴町の原始時代を記載する最初の文献は、江戸時代の一八四一年（天保一二）に成立した『新編相模風土記稿』だろう。巻三十一の早川庄岩村の項には古塚について次のような記載がある。

古塚二 孰も村南白田間にあり、僅に堆きのみにて草茂れり、土人猥に手を触ば祟ありとて甚恐憚す、

其故を詳にせず、暗夜などには塚辺光りを放つ事あり、舟子等真鶴湊の点灯と見誤り、当村の磯辺へ舟を寄せ、損壊することありといふ、

村南白田間の部分がどの地点を指すのか明らかでないが、地域が岩村と限定されるので平台古墳と推測される。

戦前

一九二八年（昭和三）に東京大学人類学教室が編集した『日本石器時代遺物発見地名表』第五版（編集の中心は八幡一郎、中谷治宇二郎）には次にあげる三遺跡がすでに確認されている。

（1）真鶴町真鶴崎 磨石斧

（2）真鶴町釈迦堂 土器・打石斧・磨石斧・石棒・石皿・凹石

（3）岩村上塗 土器・打石斧・石皿

この地名表の第四版『日本石器人民遺物発見地名表』には真鶴崎が記載されているが、これが学界に知られる最初だろう。この三か所のうちで所在地が明らかなのは釈迦堂遺跡だけである。

一九二九年（昭和四）に足柄下郡教育会が編纂、発行した『足柄下郡史』（栗原富敏編）は考古学上の遺跡を扱っているが、それは小田原市所在の弥生時代遺跡であり、真鶴町の原始時代については残念ながら言及していない。

戦後

一九五〇年（昭和二五）には、釈迦堂遺跡から採集された人面把手の土器片が金谷克己によって『考古学雑誌』に資料紹介された（『資料編』原始No.7 釈迦堂遺跡参照）。その後、一九六一年（昭和三六）に石野瑛が『神奈川大観』を著した。そのなかの湘西・湘北編の（イ）石器時代遺跡と（ロ）古墳・横穴・同時代遺跡の両項には次のような遺跡が報告されている。

(イ) 石器時代遺跡

(1) 岩村上塗 土器・打石斧・石皿

(2) 真鶴町宮ノ前 縄文包含層 土器、石器(打石斧・磨石斧)

(3) 真鶴町真鶴崎 石器(磨石斧) 一九二六年七月二七日(大正一五)

一九三二年一〇月一七日調査(昭和七)

(4) 真鶴町釈迦堂 縄文包含層(住) 土器、勝坂、土偶、石器(打石斧・磨石斧・半磨石斧・石棒・石

皿・凹石)

(ロ) 古墳・横穴・同時代遺跡

(5) 真鶴古墳

(6) 坊主山古墳 大ヶ窪 高塚

(7) 岩村古墳 平台 高塚(二基) 刀剣、耳飾り

(8) 上野塚古墳 高塚

(行頭の番号は便宜的につけた。)

『神奈川大観』によれば一九六一年(昭和三六)の時点では、真鶴町に縄文時代の遺跡が四か所、古墳が四か所存在したことがわかる。掲載された石器時代の遺跡のうちで所在地が明確なものはやはり釈迦堂遺跡だけである。上野塚古墳は、かつては現在の平台から上野を経て真鶴町役場付近までの一帯に古墳が存在していたことから、その付近の小字名の上野の名称をつけたと推測される。『資料編』では岩村古墳と上野塚古墳を平台古墳群としてまとめた。岩村古墳(平台古墳)の刀剣や耳飾りは一九三一年(昭和六)に赤星直忠が調査した際の出土

品だろう。その他の古墳は所在地がはっきりしない。

一九七九年（昭和五四）には『県史』資料編考古資料が刊行され、その中に縄文時代の遺跡として釈迦堂遺跡、古墳時代の遺跡として平台古墳・狐塚古墳の三遺跡が取り上げられている。

その後一九八四年（昭和五九）には、吉田章一郎が神奈川県教育庁文化財保護課編集の『ふるさとの文化財』（史跡・考古篇）の中で、平台古墳と釈迦堂遺跡を紹介、解説している。

一九八六年（昭和六一）になると、杉山博久が釈迦堂遺跡の学術発掘による解明と学会への報告に精力的に取り組み、『考古学雑誌』や『考古学ジャーナル』に研究を発表した。また、発掘の中間報告は雑誌『真鶴』にも掲載され、町の人々も関心を高めた。町での最初の学術発掘は、一九三一年に赤星直忠が実施した平台古墳の調査である。最近では町の城址公園整備計画に伴って、荒井城址確認のための予備調査が杉山博久によってなされている（『資料編』原始No.9 荒井城址参照）。

地元の真鶴町では、一九六二年（昭和三七）ころに郷土の歴史を学ぶ会が結成され、雑誌『郷土』を発刊した。一九六七年（昭和四二）以後、『郷土』から発展した雑誌『真鶴』が刊行され、郷土の歴史研究が数多く発表された。そして、杉山博久が一九七〇年（昭和四五）の第六号、七二年の第一〇号に釈迦堂遺跡の報告を発表すると、釈迦堂遺跡のかつての様子を描いた郷土の人々の報文が寄せられた。

第二章 縄文時代

最後の氷期であるヴールム氷期が、今から約一万年前に終わると、地球上には新しい文化が形成され始めた。それは新石器文化と呼ばれ、農業や牧畜を基盤とした。人々は定住し、磨製石器や土器、弓を持った。日本では縄文文化がこれに相当する。人々はそれまでに堆積した関東ローム層の上に生活し始めたのである。

縄文文化は、弥生時代の始まる紀元前三〇〇〇年ころまで、約一万年の長期間続く。この間、自然環境の変化などを契機として、道具の進歩や生活形態の変化などのいくつかの文化上の変遷がみられた。そこで、考古学では、長い縄文時代を文化上の特徴をもとに、早・前・中・後・晩期に時期区分をし、さらに各時期を土器型式で表される小時期に細分している。各時期には一〇型式前後の小時期が存在する。

真鶴町に遺跡が築かれた時期は早期、前期、中期、後期である。晩期の遺跡は今のところ発見されていない。真鶴町の縄文時代の遺跡はたいがい海岸に近い位置に立地するが、急な崖を下りなければ海岸に行くことができないという共通した地形上の制約がある。

第一節 各時期の様子

早期 今から約一万年前、日本列島の気候はしだいに温暖なものへと移り変わっていった。陸上の氷は

融け、海水へと姿を変えていった。各地の海岸の汀線がそれまでの位置よりも内陸部に移動する海進現象がおこった。この自然環境の変化は前期中葉まで進化した。

人々はやっと定住の傾向をみせ始める。縄文時代の住居は竪穴住居と呼ばれ、地表を掘りくぼめて床とし、屋根を直接地面まで葺いたものである。住居の床形は不整形の円形が主流を占めているが、まだ定型化したものはなかった。早期中葉以降には円形と方形の住居が混在し、しだいに柱の位置などが定まっていた。

早期後半の景観では一般に落葉広葉樹林が目につき、コナラ、ニレ、ケヤキ属の樹木が繁茂していた。現在、これらの樹木は長野県などの内陸部で山がちな地域や東北地方に一般的に見られるもので、当時の南関東地方はやや冷涼な気候だったと考えられる。

真鶴町の早期の遺跡には釈迦堂遺跡A・B地点と番場浦遺跡が確認されている。最初に築かれた遺跡は釈迦堂遺跡A地点であり、早期中葉の田戸下層式期のころである。次に番場浦遺跡が築かれた。この遺跡から採集された土器は胎土の中に植物繊維が混入されているという。このような特徴を持つ土器は早期の後葉によくみられるもので、釈迦堂遺跡A地点に続く時期に位置づけられるものである。その後、遺跡はふたたび釈迦堂遺跡B地点に築かれる。ここからは早期末の入海Ⅱ式と呼ばれる愛知県知多郡地方の土器が発見されている。この時期には、関東地方の文化を主体としながらも、愛知県に中心を持った文化の影響を受けたのだろう。

早期に属する遺跡は真鶴町だけでなく湯河原町にも存在する。尾崎山遺跡や三本松遺跡、金井堂遺跡、出雲台遺跡である。これらは真鶴町の遺跡と尾根を隣にする極めて狭い地域に所在している。真鶴・湯河原町の狭い地域に多くの遺跡が存在するのは黒曜石の産出が大きく関係しているように思われる。

前期

気候の温暖化は七五〇〇年前からいっそう進み、照葉樹林は海岸部から内陸部へと拡大していった。汀線も東京湾では現在の海拔二〜四メートルの位置に移動してきた。海進の最も進んだ時期である。

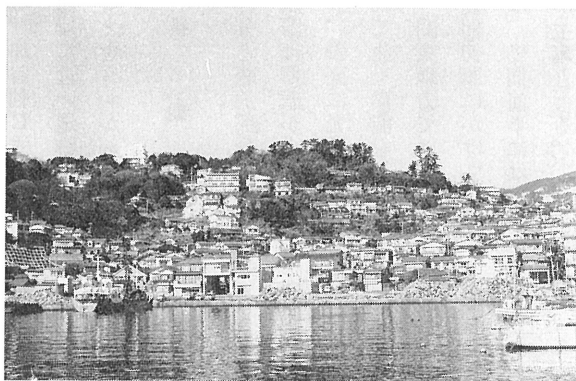
この時期になると、人々は定型化した竪穴住居に住むようになる。住居はたいがい内部に炉を持つ方形の床形をしており、屋根を支える柱は四本である。家々は台地の縁辺に立ち並び、六〜七戸で集落を形成している。集落は馬蹄形に家を配置することがある。土器は器種が多くなり、食生活の変容を物語っている。

この時期の遺跡には沢尻・平台遺跡、釈迦堂遺跡A・B地点がある。沢尻・平台遺跡、釈迦堂遺跡B地点は前期後葉の諸磯式期の遺跡である。真鶴町に遺跡がつくられた早期末とは時間的に大きな隔たりがある。早期末の人々は、前期前葉には真鶴町から他の地域に移動してしまっただが、諸磯式期には三か所に遺跡がつくられ前の時期より発展した。この時期に続く十三菩提式期には釈迦堂遺跡A地点に遺跡がつくられた。釈迦堂遺跡のB地点で生活を営んでいた人々は、次の時期にA地点に居を移したのであろう。

中期

五〇〇〇年前ころ、口縁部に蛇などの動物意匠を施した土器が盛行した。他の地方では火炎土器と呼ばれるものが現れたり、装飾的な意匠が強調された土器が出現した時期である。また、かつては「厚手式土器」と呼称されたように、土器の器壁が赤褐色で他の時期に比べて厚いのも特徴的である。

この時期の南関東地方では一か所の遺跡の規模が拡大し、遺跡数も増大するのが一般的である。また、一か所



釈迦堂遺跡（遠望）

の遺跡から出土採集される土器や石器などの遺物量も、他の時期の遺跡よりも豊富である。とりわけ、土を掘る道具の打製石斧や矢の先の石鏃はよく採集される。打製石斧は竪穴住居の建築にも使用されたが、その数の多さは地下茎・球根類の採集にも大いに利用されたことを示している。

集落は一〇戸前後の家で構成される。円形の床を持つ竪穴住居を台地の縁辺に馬蹄形あるいは環状に配するのが一般的である。しかし、南関東地方西部地域（主には神奈川県）では、竪穴住居のほかに四〇～五〇センチ大の根府川石のような板石や偏平な河原石を敷きつめて入り口や室内の床とする敷石住居も出現する。

中期の遺跡には謡坂遺跡、釈迦堂遺跡A・B・C地点がある。中期初頭の五領ガ台式土器が発見されるのは釈迦堂遺跡B・C地点である。この型式は前期末の十三菩提式土器に続く時期のものであり、前の時代に釈迦堂遺跡A・B地点に居を構えて生活していた人々が引き続き釈迦堂遺跡で生活を営んでいたことを示している。次の勝坂式期になると、釈迦堂遺跡の全地点に遺跡がつくられ、その後の加曽利E式期までの長い期間、人々が生活をしていた。人口増加によって集落が拡大したと思われる。勝坂式土器は中部地方から関東地方西部にかけて分布し、胴部の文様や把手のなかには蛇や人面などをかたどったものがある。この時期は甲信地方の文化の影響を強く受けた時であ

る。加曽利E式期には謡坂遺跡も形成された。釈迦堂遺跡よりさらに海岸に近い遺跡で、岩地区の海で漁をすることを生活の主目的としたことをうかがわせる。

後 期

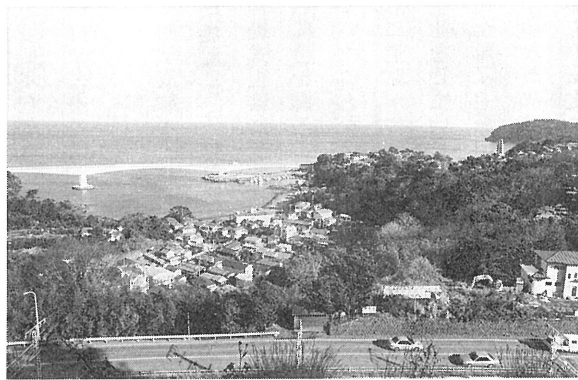
今から四〇〇〇年前になると、土器の表面に施した縄文の一部を消し、磨いて無文とすることで文様のある部分と磨消部分を対比させて装飾効果を高めた土器が登場し始める。

土器は器壁が中期に比べて薄くなり、色も赤褐色から黒褐色と変わり、器面に光沢を持つものが一般的となる。また、器種では液体を入れて注ぐ機能を持った注口土器や浅鉢・皿などが新たに出現する。

関東地方では引き続き遺跡数が増加する。東京湾では、中期末から後期初頭にかけて貝塚が多数残された。彼らの住んでいた住居の床形は、後期前半には円形と方形の両者が混在していたが、後半には方形が主流となる。

後期の遺跡には上野、平台遺跡の二か所があるが、後期初頭の遺跡がない。釈迦堂・謡坂遺跡に足跡を残した人々は他の地域に居を移したのだろうか。後期前葉の堀之内式期になると上野遺跡がつくられ、次の加曽利B式期に平台遺跡が残された。どちらも謡坂遺跡のすぐ近くの地点であり、海岸に近い。人々の生活はより漁撈に依存したのであろう。

真鶴町の縄文時代の遺跡は平台遺跡を最後に姿を消す。縄文時代の人々は生活する基盤を真鶴町では見いだせ



平台遺跡（遠望）

なくなり、他の地域に移住してしまつたのである。湯河原町でも後期以後の遺跡が発見されていない。湯河原町鍛冶屋地区を含む箱根産の黒曜石は旧石器時代から南関東地方に供給されてきたが、しだいに長野県和田峠産の上質な黒曜石にその地位を奪われていった。平台遺跡以後の遺跡が存在しないのは、鍛冶屋地区の黒曜石が交易の対象とならなかつた結果だろうか。

第二節 漁撈生活

貝

塚

町には真鶴と岩に漁港があり、漁業に従事している人も多くいる。漁撈、採集、狩猟以外に生産手段を持たない縄文時代には、生活において漁撈の占める割合はよりいっそう大きかつただろう。

南関東地方の縄文時代の漁撈の様相は、東京湾沿岸に数多く見られる貝塚の調査によって明らかにされてきた。神奈川県貝塚も主に三浦半島から東京湾沿岸に残されている。相模湾沿岸にも貝塚は発見されているが、花水川西岸の平塚市五領ガ台貝塚が最も西部に位置している。平塚市以西に貝塚が形成されなかつた要因は、海岸線の大部分が磯で構成されていることだろう。もちろん、真鶴町にも貝塚は発見されていない。

漁

具

縄文時代の漁は主に沿岸の釣り、鉤・ヤスによる捕獲を中心としたものだろう。長さ四×三センチの土器破片の長軸の両端に浅い刻みをつけた土錘、河原石の両端を打ち欠く石錘などは、貝塚を形成していない海岸近くの集落遺跡でもしばしば採集されることがある。これらの錘はいずれもオモリに使用されたものである。オモリを使用する漁具には釣り針と網があるが、漁網は今のところ発見されていない。その

ため網にはどの種類のオモリが使用されたのか不明である。土錘と石錘は形態上は類似するが、重さはまったく違う。釣りの対象になった魚や漁場によって使い分けられたのだろうが、明らかではない。

釣り針は骨角製で鹿の角を利用したものが多く、鹿の角で製作した釣り針は、海中では表層を泳ぐ小魚のように見えるのか、擬餌針の効果がある。縄文時代に作製された釣り針は長さ一〜三センチの小型なものから七センチを超える極大型のものまである。使う針の大きさの違いは対象魚の大小、開口度に関係がある。縄文時代中期の仙台湾では長さ五〜七センチの大型釣り針が多くなり、マダイ・カツオ・マグロなどの外洋魚を捕獲していた例もある。

貝塚から出土した魚骨の分析によると、捕獲されたマダイは四〇〜六〇センチの成魚、クロダイは三五〜四〇センチの成魚と大きさや魚の成長度が限られるという。漁具は四〇〜六〇センチの体長群の漁獲には最大の効果が発揮されるが、二五センチ以下の体長群の漁獲については不適格の道具だったのだろう。網の存在は不明であるので、釣り上げたことを考えると、五〜七センチの釣り針で成魚だけをうまくとらえていたのである。

漁をするための舟は、千葉県加茂遺跡（前期）の出土例によれば、半截した原材をくりぬいた割竹形をなし、長さ五メートル以上、幅八〇センチのものであった。

魚 種

縄文時代の各時期に神奈川県で漁獲された魚種は次のとおりである。横須賀市にある早期の夏島貝塚では、サバ・カツオ・ブリ・マダイ・クジラ、中期の平塚市五領ガ台貝塚では、イルカ・クジラ・マダイ・クロダイ・スズキ・サメである。中でもクジラとイルカの骨が多数出土している。後期の藤沢市西富貝塚ではサメ・エイ・カツオ・マグロ・クジラが検出されている。

東京湾から相模湾にかけてはマダイ、イルカ漁が特徴的である。イルカは湾口に集まるイワシ類の小魚を追って岸に近づく。人々はイルカが岸に近づいたところをみはからって丸木舟を出し、骨角製の銚やヤスで捕獲したのである。西方貝塚や五領ガ台貝塚で検出されたクジラも、シャチなどに追われ岸に近づいたところを捕獲されたのだろう。

漁の一年

魚にはその土地の岩礁底や砂泥底に一年中生息しているものと、定期的に回遊してくるものとがある。マダイ・イシダイ・クロダイの類は岩礁魚であり、カツオやブリなどは回遊魚として知られたものである。

カツオは早期の夏島貝塚、前期の西方貝塚、後期の堤貝塚、西富貝塚などから、またブリは夏島・堤・西方貝塚から検出されているので、いずれも相模湾には現在と同じように回遊してきたと思われる。岩礁魚のうちのタイル類は夏島と諸磯貝塚、五領ガ台貝塚で発見されている。茅ヶ崎と藤沢市の貝塚では海底地形の違いのためか確認されていない。その他の貝塚から発見されている魚にはサメ・エイ・クジラ・スズキ・マイワシ・ボラなどがある。

真鶴の海では、三～六月の春から初夏にかけてはマダイ・クロダイ・メバル、七～十月の夏から秋にかけてはマダイ・クロダイ・イシダイ・カツオなどがとれただろう。十一月から十二月にかけてはイシダイと、とれる種類が減少する。一月から三月にかけてはブリがとれたと思われる。このほかに冬のイルカ漁がある。現在の伊豆半島東岸の川奈や稲取の例では、毎年九月末から冬にかけてイルカが回遊してくるという。福浦や真鶴、岩海岸の入り江に入り込んだイルカは丸木舟で追いかけれ銚で捕獲されただろう。しかし、一年のうち十月から三月までは捕獲する魚の種類が少ないため、生活の重点は漁よりも狩猟に移っていたのではなからうか。

貝は発見されていないが、真鶴の縄文時代中期遺跡に住む人々が採集したのは、岩礁性の海底に生息するサザエ・アワビ・トコブシ・マガキなどであろう。律令制時代、相模国の調としてアワビが上納されたことは、縄文時代以来の漁が真鶴や三浦半島で行なわれていたことを示している。

食 べ 物

当時の魚の調理法には焼く、煮る、蒸すの三つの方法が考えられる。ただし、貝塚から出土する魚の頭部や鰭ひれの骨などが焦げたり、焼けたりしている例はごくまれであることから、深鉢などの土器で煮込まれたり、蒸されたりするのが一般的であったろう。

縄文時代の人々が採集した植物性食料にはドングリ類・トチ・クルミ・クリなどの木の実（堅実類）がある。ドングリ類にはアカガシ・アラカシ・イチイガシ・マテバシイ類があり、イチイガシとマテバシイ類はアク抜きしないで食用となる。

地下茎・球根類は組織が柔らかいという性質上、発掘調査ではほとんど確認されていない。しかし、民俗例を参考にあえて植物名をあげると、クズ・ワラビ・ユリ・ヤマイモなどがある。このほかに、ヒョウタンと緑豆がある。これらは前期に属する福井県鳥浜貝塚の低湿地から発見されたもので、ヒョウタンの果皮破片、種子は多量であった。この二種類の植物は日本のものではなく、ヒョウタンは西アフリカ原産、緑豆はインド原産である。ヒョウタンは液体などの入れ物や杓子などに利用されたのだろう。

人々は木の実などの植物性食料を石皿と磨石で砕きすりつぶして粉状にし、さらにデンプンと混ぜ合わせコッペパン状にして焼いて食べたと思われる。ドングリやトチなどのアクのある木の実は、すりつぶした後水にさらすなどの方法が採られた。木の実は秋から冬にかけて採集され、住居の床などに穿うがった貯蔵穴と呼ばれる穴の中に保存した。佐賀県西有田町の縄文時代中期に属する坂ノ下遺跡では、貯蔵穴から出土した木の実の九八％はブ

ナ科の堅実類であったという。

縄文時代の人々が捕獲した主な陸棲動物はシカ・イノシシであった。真鶴町は箱根外輪山の南麓に位置し、シカやイノシシが生息する条件が整っていたと思われる。現在でも、箱根山から伊豆半島一帯にかけての海拔五〇メートル以上の地域ではイノシシが生息しており、伊豆半島の天城では狩猟も行なわれている。

弥生時代

紀元前三世紀ころ、金属器や水稻耕作などを内容とする大陸文化が北九州にもたらされ、新しい時代の幕開けとなった。弥生時代はおよそ紀元後三世紀ころまで続く。この間は前期、中期、後期の三時期に細分される。この新しい文化は、前期の間に北九州から西日本一帯に瞬く間に伝播し、中期初頭には関東地方に波及した。神奈川県では、北九州地方の前期弥生土器の系譜を引く遠賀川系の壺形土器が秦野市同明遺跡から出土しており、相模川以西地域が最も早く弥生時代に突入したことを示している。

真鶴・湯河原町地区では弥生時代の遺跡が調査、報告されたことはない。ただ、湯河原町の平地を臨む熱海市泉地区の丘陵上には後期の嶽の山遺跡が存在するので、真鶴町には存在しないと断言することはできない。真鶴町に弥生時代の住居遺跡が存在したとすれば、人々は水稻耕作以外の方法で食料を確保していたのだろう。

第三章 古墳時代

古墳時代とは古墳が造営された紀元後三〇〇年ころから七〇〇年ころまでの期間をいう。時代は埋葬施設の形態や副葬品などの文化上の相違に基づいて、前・中・後期の三期に区分される。この時代の住居は弥生時代と同じく竪穴住居が一般的である。土器は弥生土器の系譜を引く土師器が使用されたが、古墳時代中期から大陸伝来の新技術で焼成された須恵器が併用された。

真鶴町では古墳時代の土師器・須恵器を出土する集落遺跡は確認されていないが、古墳は二か所で確認されている。

第一節 古墳の出現

前 期

南関東地方では社会を変質させる新しい文化は西方から波及してくる。弥生時代後期中葉になると相模川以西地域では、尾張地方の弥生土器の特徴をもった土器が南関東地方の土器と混在して現れ始める。小田原市諏訪前遺跡では、弥生時代後期末に属する古い形態のS字口縁台付甕（口縁部がS字状に立ち上がる特徴を持つ台付きの甕）が出土している。この形態の土器は尾張地方の代表的な甕である。弥生時代終末期から政治的影響が尾張地方を通じてあったと思われる。次いで古墳時代初頭には、畿内地方で祭祀に使用

されていた土師器と器種の組み合わせが同じ土器群が伝播してくる。各地での初期古墳の出現と土器群の波及は一体化したものであり、畿内地方の政治勢力の影響が各地に古墳を出現させたと考えられる。

前期の古墳は丘陵上に造営されたものが多く、埋葬施設は竪穴式石室や粘土槨^かなどである。副葬品には玉類、鏡など呪術的宝器類が多い。

相模川以西地域の四世紀に属する前期古墳には平塚市真土大塚古墳、厚木市吾妻坂古墳、伊勢原市愛甲大塚古墳などがある。これらの古墳のうち最も古いと考えられているのは愛甲大塚古墳である。この古墳は墳長推定七〇メートル以上の前方後円墳で、四世紀前半に属する。愛甲大塚古墳に続く四世紀後半の古墳には、前方後円墳の真土大塚山古墳と円墳の小金塚古墳がある。これらの古墳に続く時期のものが吾妻坂古墳である。墳丘は周囲が削り壊され形態は不明である。

真土大塚山古墳の副葬品である三角縁神獣鏡は、京都府山城町椿井大塚山古墳や岡山県岡山市の車塚古墳出土の鏡と同範鏡^{はん}（同じ鋳型で製造された鏡）であった。このことは、真土大塚山古墳の被葬者が中央政権と関係を持っていたことを示しており、注目される事実である。

古墳時代の初期に属する集落遺跡としては、厚木市子ノ神遺跡、平塚市王子台遺跡、秦野市東田原中丸遺跡、根丸島遺跡、伊勢原市比々多遺跡群などがある。これらの遺跡は、丹沢山塊から東に延びる台地上の先端付近に立地している。この台地の前面には鈴川・渋田川・歌川などが形成した平塚市から伊勢原市・秦野市に広がる大水田地帯がある。相模川西岸の前期古墳はこの広大な水田地帯を生産の基盤として造営されたのだろう。

五世紀になると、畿内では全長四八メートルを測る仁徳天皇陵（大山古墳）に代表されるように、平地に巨大な前方後円墳が出現する。政治的権力を古墳の大きさと表現するのである。この

中期

ような傾向は全国的にみられ、各地に大古墳を出現させた。相模川以西地域でも厚木市の地頭山古墳のように、県内でも有数の大きさを持つ古墳を生み出した。

五世紀に属する古墳には厚木市地頭山古墳、伊勢原市上坂東三号古墳などがある。地頭山古墳は全長七メートルの神奈川県下最大級の前方後円墳である。また、上坂東三号古墳は国道二四六号線の善波峠付近の丘陵上に位置する円墳で、周溝から五世紀後半に属する土師器の高坏や、須恵器の蓋、坏が検出された。土器には丹彩が施されており、葬送儀礼等に使われ周溝に残されたと思われる。

続く六世紀の前方後円墳には全長四六メートルの秦野市二子塚古墳がある。古墳は金目川を南に望む海拔約七〇メートルの段丘端に位置しており、周辺には円墳群や横穴墓群が存在している。

酒匂川流域ではまだ前・中期の古墳は知られていない。真鶴町の古墳時代前・中期に属する遺跡も残念ながら確認されていない。

後 期

この時期には鉄製品の普及により生産力が向上した。このため、沖積大平野の大きな政治勢力ばかりか小さな地域にまで古墳を造営する被葬者が登場する。しかも古墳は一基ではなく、数基以上の小円墳が密集しているのが一般的になる。小円墳は直径一〇メートル前後の墳丘を持ち、横穴式石室を主体部とする。尾根上や丘陵上、台地上に立地する、いわゆる群集墳である。そして、副葬品は武器や須恵器などの日常品となり、量的にはさほど多くない。古墳は政治的シンボルとしての墓から家族的な性格を有した墓となったのである。墳丘を有する古墳にかわる横穴墓も全く同じ性格の墳墓と思われる。

相模川流域の厚木市上依知古墳群、登山古墳群、金目川流域の秦野市桜土手古墳群、平塚市塚越古墳、伊勢原市渋田古墳群、酒匂川流域の南足柄市塚田古墳群、小田原市諏訪の原古墳群などが後期（大部分は七世紀）に位

置つけられている古墳である。これらのうち登山一号墳は円筒埴輪と武人・男子・女子などの人物埴輪、家形埴輪、馬形・鳥形などの動物埴輪が、多数発見されたことで知られる六世紀中ごろの古墳である。また、南足柄市の塚田二号墳では挂甲・馬具・須恵器・鉄鏃・直刀・鉄鉾・金銀装環頭太刀・金銅環・琥珀製環玉など、後期の古墳としては極めて多い副葬品が出土している。時期は六世紀中葉から七世紀初頭である。

横穴墓

このほかに墳丘を築かず斜面に横穴式石室のような墓室を持った横穴墓もある。相模川以西地域では大磯丘陵の急斜面に数多く分布する。この墳墓は一か所の急斜面の比高二～三メートルの位置に複数築かれるのが一般的である。主体部の平面形は羽子板状や逆台形などを呈し、天井はアーチ形である。入り口には閉塞石が置かれている。副葬品には直刀などの武器類、装飾品の玉・環類、須恵器、土師器などがあるが、墳丘を持つ古墳と同様に量はさほど多くない。横穴墓は六世紀後葉から七世紀前半の時期に位置づけられる。七世紀に爆発的に造営されて八世紀には造営されなくなるようである。

第二節 真鶴の古墳

時期

真鶴町には平台と狐塚の二か所に墳丘を持った古墳が確認されている。平台古墳は一〇基ほど存在した古墳群であったが、各古墳の位置や大きさ、石室の構造などはほとんどわかっていない。赤星直忠の記録によれば、そのうち一基は河原石を積み上げた横穴式石室の主体部を持つ古墳である。狐塚古墳群は現在までに三基が確認されている。一・二号墳は河原石を積み上げた横穴式石室を持った古墳である。これらの古墳群の墳形は確認されていないが、いずれも小円墳だろう。平台古墳群、狐塚古墳群ともに内部構造や副

葬品から古墳時代後期に造営されたと考えられる。

狐塚古墳出土のフラスコ型長頸壺は相模川以西地域では一般的であり、これを出土する周辺の古墳には小田原市諏訪の原古墳群の中の総世寺裏古墳、松田町唐沢横穴墓、秦野市桜土手古墳群九・一三・二四・四〇号墳、秦野市の岩井戸横穴墓がある。いずれも古墳時代後期に属し、七世紀のものと考えられている。

被葬者

平台古墳群と狐塚古墳群はまったく異なる丘陵に立地している。一地点の古墳群は一集団によって造営されたと考えられるので、真鶴町には墓域を異にする二つの集団が存在したと思われる。

古墳時代前期、中期の古墳、遺跡が発見されていないので、この二つの集団は後期になって移住してきたのだろう。被葬者は律令制時代の里長クラスにあたり、集落の長として古墳造営のために集落の人々を動員し、岩沢川の河床より石室の壁となる河原石や天井石となる板石を運搬させていたのだろう。

古墳の副葬品には須恵器や鉄製品など他の地域との交易でしか入手できないものがある。しかし、それらは石室内に埋納されてしまうので残された家族は使用できなくなってしまう。古墳造営はある程度の経済力がなければできないのである。古墳のある地域では造営の経済的基盤となる水田が存在するのが一般的だが、真鶴町には水田はほとんどない。湯河原町には多少の平地があるが、そこには真鶴町の古墳群と同時期の古墳が存在するので、真鶴の古墳の被葬者がそこを治めていたとは考えにくい。二つの集団は水稲耕作以外の方法、おそらくは漁業で生活を営んでいたのだろう。そして、その生活方法は古墳を造営するほどの富を生み出したのである。

この古墳群の後、奈良時代、平安時代の集落は発見されていない。他の地域に再び移住したのだろうか。平安時代後半に属する宋銭が荒井城址から検出されているので、まだ集落が発見されていないだけだと思う。いずれにしても古墳以外の遺跡がまったく発見されていないので、わからないことが多い。